

李登輝元総統ら台湾オピニオンリーダーを訪問



株式会社第一コンサルタンツ
代表取締役社長
右城 猛

1. まえがき

坂本龍馬財団の訪台団に加えていただき、7月22日から3泊4日の日程で淡水市と台南市を訪問。台湾を代表するオピニオンリーダーである李登輝台湾元総統、林蒼生(りんそうせい)氏、許文龍(きよぶんりゅう)氏の3名からレクチャーやレセプションを受けてきた。

龍馬財団とは、世界に龍馬スピリッツを発信することを目的に2012年4月に設立された一般財団。代表理事は、坂本龍馬記念館の森健志郎館長。高知県技術士会幹事の森直樹氏の実兄である。

訪台団への参加は、森直樹氏から声を掛けて頂いたのが切っ掛けである。台湾は、平成11年に921台湾大地震の調査、そして今年の2月に観光をしていたが、20世紀の偉大な政治家・李登輝元総統に拝謁できると聞き、夫婦で参加させていただいた。

訪台団のメンバーは、森健志郎館長を団長に、坂本家9代目当主坂本登氏ら財団の評議員と理事を中心にした総勢35名であった。

台湾出発の直前に、龍馬財団より黄金の会員証と坂本登氏がデザインしたブルーのバッジが送られてきた。会員証の裏側には、「私の龍馬スピリッツ」を書くようになっていた。同時に送られてきた資料を読むと、龍馬スピリッツとは、「私心なく志は高く公に尽くす」ということであり、龍馬財団の目的は「龍馬スピリッツあふれる人材の育成」にあるようだ。

会員は、会員証を常に持参し、自らの龍馬スピリッツを確認しながら行動しなければならないことになっている。

会員にはなったものの、「私の龍馬スピリット」が何なのかを決めることができないまま台湾へ発つことになった。

2. 李登輝元総統

台湾元総統の李登輝元総統は、1923年生まれで現在89歳。終戦を迎えた22歳まで日本人として日本教育を受けておられる。

1988年に台湾人として初めて総統になり、在任中の12年間に、台湾をそれまでの一党独裁から民主主義国家に変革させ、世界最高水準の経済大国に育て上げた。その手腕は、「ミスター・デモクラシー」「政治の哲人」などと称されている。現在においても著書や論文の執筆、講演、テレビ出演、要人との面談など超過密なスケジュールをこなし、アジアのオピニオンリーダーとして絶大な存在感を誇っている。

李元総統は、2009年9月5日に東京の日比谷公会堂で講演をされた翌日、龍馬の生誕地である高知を訪問され、桂浜の坂本龍馬像や坂本龍馬記念館を見学し、城西館で「龍馬の船中八策と私の政治態勢」と題した講演をされている。

その来高が切っ掛けとなり、2010年には海外で9番目、国内も含めると139番目となる龍馬会が台湾に発足し、高知県から尾崎正直知事をはじめ20数名の訪問団が発足式に出席している。



李登輝元総統の事務所があるビルの入り口

左より森直樹氏、筆者、船井勝仁氏

今回の訪台の目的は、昨年の11月に大腸がんの手術を受けられた李元総統に拝謁し、全快のお祝いを申し上げると共に、龍馬財団名誉会員への就任をお願いすることにあつた。

李元総統の事務所は、台湾八景・東洋のベニスと呼ばれる風光明媚な町・淡水にある。台北から北西の方向に約20km、バスで約40分の所である。30階建てのビルの29階と30階が事務所になっていた。

拝謁前の森館長の説明では、「15時から17時まで2時間を空けていただいているが、事前の打ち合わせはしていない。どのような展開になるかまったく分からない」ということであつた。

用意された29階の会議室で待機していると、身長186cmの大柄な李登輝元総統が、真っ白なシャツを着て笑顔で会場に見えられた。全員が起立し、拍手でお迎えした。

森館長の挨拶に続き、坂本登氏が作詞された「龍馬甚句」を竹内土佐郎先生(元中芸高校校長、安田町会議員)が李元総統の正面に起立して朗詠、クラシックギターデュオ「いちむじん」がNHK大河ドラマ「龍馬伝」のテーマ曲と「南国土佐を後にして」を演奏、金子裕則氏と河村泉兵衛氏が、「RYOUMAからの手紙」を紋付き袴姿で熱唱された。その後、竹内土佐郎先生が書道作品、帽子デザイナーの山本正子さんがご夫婦ペアの帽子をプレゼントされるなど、出席者の皆さんがそれぞれの特技を生かした自作のお土産を李元総統に手渡された。このときばかりは、何の特技も持たずプレゼントができない自分を情けなく思った。

森館長からは、龍馬財団の名誉会員証とバッジが贈呈された。

その後李元総統は、90分間にわたり訪台団一行のために、日本語でレクチャーして下さった。世界の政治経済の情勢を踏まえ、今後の日本はどうすべきか、という内容の話であつた。

「政治家は国益と国民の幸せを第一に考えなければならない。世界の政治経済が混沌としている今の時代こそ、坂本龍馬のように大きな志をもった青年が出てこなければならない」と熱く語られた。

李元総統は、現代の日本人以上に「日本精神」、



レクチャーをされる李登輝元総統



各テーブルを回って気さくに歓談される李登輝元総統

「日本人の心」を持っておられる。国を愛し、人民を愛する気持ちが非情に強い。このような人が日本のリーダーであればと参加した誰もが思ったことだろう。

偉大なる李元総統の講演を直接、間近で聞くことができたことは、私にとって夢のような出来事であつた。私の隣にいた人達が「ものすごいオーラを感じた」「鳥肌が立った」「感動して涙がでてきた」と話していたが、私も同感であつた。

レクチャーの後、台北市内のレストラン「欣葉」で台湾龍馬会主催のレセプションが開かれた。レセプションには、台湾龍馬会の名誉会長である李登輝元総統も出席して下さり、30年物の紹興酒と17年物のザ・マッカランのウイスキーを私たちのために差し入れて下さった。そして、病後の身であるにも関わらず、20時40分まで約2時間、各テーブルを歩き回って、気軽に参加者との記念撮影に応じ、気さくに歓談をして下さった。

李元総統を見ていると、レクチャーのときの「この歳になっても人民と国のことを常に考えている。残された命を人民と国に捧げる」という言葉がより一層重く感じられた。

3. 統一企業会社の林蒼生会長

統一企業会社は、高清愿(こうせいげん)氏が 1967年に創業し、一代で台湾ナンバーワンの小売業に育てた会社である。

高氏は、小学校 6 年の時、働き盛りの父親を失い、小学校を卒業すると同時に木工製品会社に勤め家計を支えている。15 歳の時に呉服店に徒弟として入り、毎日夜を日に継いで懸命に働き、商売の勘を学び、働く者の心を理解し、人としての修行を積んだといわれている。

現在は、林蒼生氏が二代目の総裁に就かれ、彼の経営手腕によって、台湾や中国などでセブンイレブン、キッコーマン醤油などの小売業を展開し、売上高 3 兆円を誇るまでに業績を伸ばしている。

龍馬財団の評議員・船井勝仁氏の御尊父に当たる船井総合研究所の船井幸雄会長が、創業者の高清愿氏と懇意にされている関係で、今回の訪問が実現したようである。

統一企業本社の玄関にある電光掲示板には、「歓迎 坂本龍馬財団一行 興 船井勝仁社長蒞臨指導」と表示されていた。

私たちが案内されたのは、背もたれと肘掛けの付いた立派な椅子が約 200 脚、学校形式に並べられたホールであった。正面の壁には、「塑化剤事件 統一之恥」「DyDo 包装水事件 統一之恥」と書かれた横幕が張られていた。

「塑化剤事件」とは、昨年 5 月、食品添加物である乳化剤「起雲剤」の原料に、がんや機能障害を起こすとされる可塑剤、DEHP が使用されていたことが発覚し、台湾を震撼させた食品汚染事件である。

「DyDo 包装水事件」とは、昨年 6 月、台湾から輸入したミネラルウォーター「ミウ LV525ml ペットボトル」のキャップの不具合により水漏れがあり、ダイドードリンクが自主回収した事件である。



レクチャーを受けた統一企業会社本社のホール



レセプションで挨拶をされる林蒼生総裁

企業の信用に関わる問題が起きた場合、二度と発生しないような取り組みを全社的に行うのは当然である。しかし、横幕に大きな字で「〇〇統一之恥」と書き、一年以上経った今でも忘れることがないように掲示していること、しかもその掲示場所に海外からの訪問客を案内したことに驚いた。ここまで徹底して再発防止に取り組む企業があることを知り、勉強になった。

林総裁から、12 時 40 分まで約 2 時間にわたって、経営のポイントについてのレクチャーを受けた。

レクチャーの中で印象に残ったのは、「人は少しでも条件が良い会社があれば辞めてその会社に移る。しかし、統一企業は社員を大切にしているので定年まで働いてくれる。経営者には義理人情がなくてはならない。企業のサイズは、経営者の心のサイズで決まる」という言葉であった。

創業者の高清愿氏は、「台湾の松下幸之助」と呼ばれている。林総裁は、創業者の経営理念をしっかり引き継ぎ、それが会社発展の原動力になって

いるのだろうと感じた。

レクチャーを受けた後、統一企業の迎賓室に移動し、林総裁主催のレセプションがあった。昼食であるのに肉、マグロのトロ、大きなエビ、ホタテ、無農薬のトマトジュースなど食べきれないほどの豪華な料理が用意されていた。

4. 奇美博物館と許文龍氏

続いて、台南市仁徳区にある奇美博物館を訪問した。奇美博物館は、奇美グループの創業者、許文龍氏の社会貢献の経営理念の下、1992年に設立された博物館。予約制で無料公開されている。

奇美グループの中核会社の奇美実業公司是、1959年に許文龍氏が創業した会社で、家電や自動車部品の原料であるABS(アクリロニトリル、ブタジェン、スチレン)樹脂の生産量においては世界一を誇っている。

奇美博物館は8階建ての建物で、5階から8階に、ヴァイオリン、オルガン、日本刀、ルネッサンス派やバビルソン派の名画のほか、アジア全域に渡る鳥類の標本など、数万点の広範囲にわたる文化的美術品や教育的コレクションが展示されている。

石栄堯(せきえいぎょう)氏が、閉館となる17時までの約90分間、館内の展示物をセレクトしながら説明して下さった。じっくり見れば1日はかかると思えた。現在の博物館には、所蔵品の1/3も展示できていない。現在の5倍の規模の博物館を新たに建設中で、完成すれば展示品共々台南市に寄贈するという説明であった。

台湾人から尊敬され「台湾近代化の父」と呼ばれている後藤新平が、座右の銘としていた言葉に「金を残す人生は下、事業を残す人生は中、人を残す人生こそ上なり」がある。許文龍氏は、この言葉を経営理念にしていると思われる。

美術館を見学後、ホテル情定大飯店で、許氏と奇美の社員が、わたし達を豪華な料理とヴァイオリンの演奏や懐かしい歌でもてなして下さった。

最後の別れ際に、「荒城の月」「仰げば尊し」「蛍の光」を全員で合唱したときは、奇美の社員も目に涙を浮かべていた。



ヴァイオリンを弾く許文龍氏

許氏は実業家であるが、彫刻家として優れた技術を持っておられ、台湾に貢献した日本人の功績を顕彰するため胸像を製作している。博物館に展示されていた新渡戸稲造と鳥居信平(とりいのぶへい)の胸像は、その中の二体であった。

訪台団に参加されていた静岡理工科大学の志村史夫教授から、教授が執筆された静岡新聞のコラム記事を旅行後にメールで送っていただいた。それを読んで、許文龍氏を訪問することができたのは、鳥居信平のお陰であるであることを知った。

台湾最南端の屏東県(へいとうけん)では、台湾統治時代に農業土木技師鳥居信平によって造られた地下ダムが、80余年経ったいまも変わらず、20万人以上の地域住民の生活を支えている。許文龍氏は、この功績に報いるため鳥居氏の胸像を製作し、鳥居氏の出身地である静岡県袋井市に寄贈された。曹屏東県長らが出席して開催された除幕式と懇親会に、志村教授も出席されており、奇美博物館の関係者との縁が生まれたのである。

5. 嘉南平野の稲作

台北駅から台湾高速鉄道に乗って台南へ移動する途中、窓の外を眺めていると、広大な水田地帯が見えた。嘉南平野(かなんへいや)である。2月に植えた稲の収穫が済み、二期作目の田植えが終わったばかりであった。

嘉南平野は台湾最大の平野であるが、元々はサトウキビすら育たない不毛地帯であった。現在、台湾最大の穀倉地帯として潤っているのは、台湾統治時代に土木技師八田与一が技術指導し、10年

の歳月を費やして完成させた嘉南大圳(かなんたいしゅう)と呼ばれる烏山頭(うざんとう)ダムと灌漑用水があるためだ。

そして、ここで作られている米は、後に台北帝国大学の教授になる磯永吉が、15年の歳月をかけて品種改良に取り組み、1940年に完成させた「蓬莱米(台湾米)」だ。

八田与一は「嘉南大圳の父」と呼ばれ、毎年5月8日の命日には、嘉南農田水利組合の人々によって今でも墓前で慰霊祭がとり行われている。また八田の功績は、教科書でも紹介されている。

磯永吉は「蓬莱米の父」と呼ばれ、磯が1957年に帰国した後、台湾政府は毎年20俵の蓬莱米を終生磯に贈っている。2012年には、磯の功績を顕彰するため台湾大学に胸像が設置された。

台湾が後に奇跡的な経済成長を遂げた背景には、蓬莱米と砂糖の増産で稼いだ外貨を元手にした工業化政策があったと言われている。

6. 訪台で感じたこと

(1) 親日家

台湾に親日家が多いことは知っていたが、三人のオピニオンリーダーにお会いし、これほどまでに日本が愛されていたことに正直驚いた。

日本を好きと言う理由は、戦後まで50年間続いた台湾統治時代の植民地政策にあるようだ。

明治政府は、台湾を植民地というよりも内地の延長と見て、欧米から取り入れた最先端の技術と莫大な予算と優秀な人材を投入し、教育、上下水道の建設、港や鉄道の整備、田畑の灌漑に力を注いでいる。

許文龍氏は、彼の著書「台湾の歴史」の中で、「戦後まで50年間続いた日本統治時代、日本ほど良心的な植民地政策を取った国はなかった。日本はインフラ整備に膨大な金と人材を注ぎ込んだ。それも、投入した資金が直ぐには回収できない医療や教育に力を入れた。これがなければ、今日の台湾の発展はなかった。戦前の日本人には使命感に燃え、遵法精神が強い立派な人が多かった。先生は皆日本から来ていたが、戦後に教え子から台湾に招かれていない先生はほとんどいない。何回



北京料理のレストランで談笑する龍馬財団の森健志郎代表理事(中央)、坂本登氏(右)、筆者(左)

も来ている。当時の先生が如何に台湾の子供たちのために一生懸命教育してくれたかを証明している」と書いている。

戦後における反日教育や近年の尖閣諸島における領有地問題などで親日家がいなくなるという意見もある。しかし、昨年(2011年)の東日本大震災の際、人口がわずかに2300万人の台湾から200億円を超える義援金が届けられた。台湾は、やはり世界一の親日国である。

(2) 日本精神

帰国の際、桃園国際空港に着いてから、財布がないことに気がついた。財布には現金以外に、運転免許証や健康保険証など日常生活に必要なカードを全て入れていた。

ホテルに置き忘れたことが考えられたので、添乗員を通じてホテルに連絡を入れてもらっていた。すると2日後に旅行会社から宅配便で財布が届いたという連絡をいただいた。

財布を開くとカードは全て入っていたが、現金はなくなっていた。カードさえ戻れば良いとあきらめていたところ、さらに2日後に「保険付」の判が押された書留郵便で現金が送られてきた。

日本では当たり前かも知れないが、海外では紛失物が戻らないのが当たり前である。

台湾人は、「日本精神」という言葉を良く使う。台湾語で「リップンチェンシン」と言い、「清潔」「公正」「勤勉」「責任感」「正直」「規律遵守」などの意味が含まれているようである。



ホテルから現金が送られてきた書留便

私の財布紛失事件で、台湾に「日本精神」が根付いていることを実感した次第である。

(3) 龍馬スピリッツ

台湾統治時代、日本から多くの教師や技術者が大志を抱いて台湾に渡り、使命感に燃え、身命を賭して台湾の発展に尽くした。この人たちが持っていた日本精神こそ「龍馬スピリッツ」であるように思える。

その龍馬スピリッツを、戦前の日本教育を受けた台湾人たちは受け継ぎ、戦後における台湾の民主化や経済発展の原動力にしている。

中でも、元台湾総統李登輝元総統ほど、龍馬スピリッツを受け継ぎ、それを実践した人はいない。

謝 辞

今回の台湾訪問でお会いした方々は、大変な親日家であるとは言え、超多忙な方ばかりである。よほどのことがないかぎりお会いすることは不可能である。

お会いできたのは、坂本龍馬記念館の森健志郎館長、株式会社船井本社の船井勝仁社長、静岡理工科大学の志村史夫教授らの尽力によるものであり、心より敬意を申し上げる。

坂本龍馬財団に対して何の貢献もしていない私たち夫婦を訪台団の一員として加えていただき、皆様には何かとお世話戴いた。心より御礼申し上げます。



台北では最も歴史がある1738年創建のお寺「龍山寺」の中門の前で家内と

参考文献

- 1) 李登輝：日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ、宝島社、2012.6
- 2) 蔡焜燦：台湾人と日本精神(リップンチェン)―日本人よ胸をはりなさい、小学館文庫、2001.8
- 3) 金美齡：私は、なぜ日本国民となったのか、BUNKO、2010.2
- 4) 高青愿：高青愿の率直経営 美しい企業を求めて、プレジデント社、2000.10
- 5) 志村史夫：時評 地下ダムの功績 台湾から鳥居信平の胸像、静岡新聞、2009.8.11
- 6) 許文龍：台湾の歴史、奇美実業、2020.4
- 7) 週刊東洋経済：台湾を震撼させた食品汚染 乳化剤に可塑剤が添加、第 6334 号、2011.7.2
- 8) 財経新聞：ダイドードリンコ 輸入ミネラルウォーターを自主回収、2011.7.1
- 9) 古川勝三：台湾を愛した日本人(改訂版)・土木技師 八田與一の生涯、創風社出版、2009.4
- 10) 平野久美子：水の奇跡を呼んだ男―日本初の環境型ダムを台湾につくった鳥居信平、産経新聞出版、2009.6

【2012年8月15日記】